

【日 時】 平成29年2月4日(土) 13:30~16:30

【場 所】 商工観光センター コンベンションホール

【内 容】

- 1 乳幼児教育ビジョン推進事業 報告
- 2 子どもを主体とした保育：公開保育報告  
(事務局 舞鶴幼稚園 朝来幼稚園 うみべのもり保育所 タンポポハウス さくら保育園)
- 3 保幼小連携：公開授業・保育報告  
(事務局 中舞鶴小学校 中保育所 中舞鶴幼稚園)
- 4 保幼小接続カリキュラム策定会議より報告  
(事務局 会長 副会長)
- 5 子どもを主体とした保育：ドキュメンテーション・記録 報告(事務局)
- 6 講演「乳幼児教育の質向上のための園内研修の方法～ドキュメンテーションを活用して～」  
神戸大学大学院 北野幸子 准教授



### 1 乳幼児教育ビジョン推進事業 報告

**文部科学省調査研究委託「幼児教育の推進体制構築事業」**  
調査研究テーマ「幼児教育の質の向上を図るために必要な推進体制に関する調査研究」

**舞鶴市 平成28年度 乳幼児教育ビジョン推進事業**

**乳幼児教育ビジョンの周知**  
○講演会、説明会の開催  
○ビジョン通信の発行  
・家庭向けにビジョンの内容をわかりやすく示す  
・市民の意見を聞き反映予定  
※防音者：溝邊和成教授(兵庫教育大学大学院)

**乳幼児教育の質の向上研修** 対象：保育所・幼稚園、小学校  
全体講師：北野幸子准教授(神戸大学大学院)  
講師：北野幸子准教授(神戸大学大学院)  
○公開、カンファレンス  
○講義(指導案の書き方、保育リーダーの役割 他)  
○グループワーク(ドキュメンテーション 他)

**乳幼児教育の推進体制構築事業検討会議**  
文部科学省の調査研究委託事業の実施について、研究推進体制の検討、研究結果の分析やとりまとめ、普及等の意見を聴くため設置するもの

**幼児教育の推進体制構築事業 採択先一覧**

1 北海道教育委員会 (ア) (イ)  
2 気仙沼市教育委員会 (ウ)  
3 秋田県 (ア) (イ)  
4 茨城県教育委員会 (ア)  
5 鹿嶋市 (ア)  
6 千葉県教育委員会 (ア) (イ)  
7 千葉市 (ア) (ウ)  
8 世田谷区教育委員会 (ウ)  
9 石川県 (ア) (イ)  
10 静岡県教育委員会 (ア) (イ)  
11 名古屋市教育委員会 (ウ)  
12 舞鶴市 (ア) (イ)  
13 東近江市 (ア) (イ)  
14 大阪市 (ア) (イ)  
15 堺市 (ア)  
16 奈良県 (ア) (イ) (ウ)  
17 奈良市 (ア)  
18 岡山県 (ア) (イ)  
19 広島県教育委員会 (ウ)  
20 広島市教育委員会 (ア) (イ)  
21 徳島県 (ア) (イ)  
22 香川県教育委員会 (ア) (ウ)  
23 高知県教育委員会 (ウ)  
24 福岡県教育委員会  
北九州市教育委員会 (ア) (イ)  
25 熊本県教育委員会 (ア)

**乳幼児教育ビジョンの周知**

**乳幼児教育ビジョン講演会**

講演『乳幼児期に大切にしたいこと』  
講師 神戸大学大学院 北野幸子准教授  
日時：平成28年6月18日(土)  
場所：中総合会館

講演『幼児期から小学校へ学びを育む環境』  
講師 兵庫教育大学大学院 溝邊和成教授  
日時：平成28年10月29日(土)  
場所：商工観光センター

**乳幼児教育ビジョンの周知**

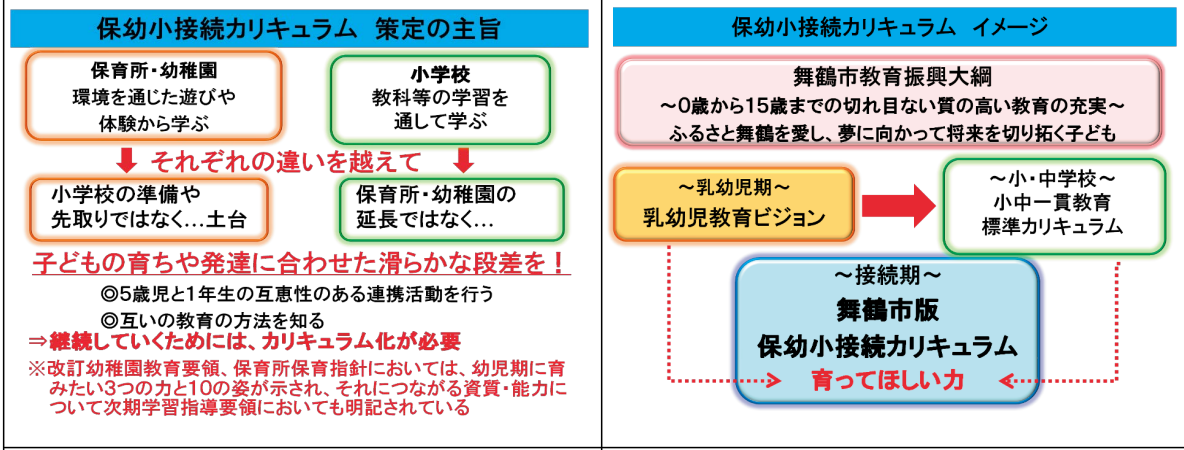
日時：平成28年7月8日(金)  
場所：城南会館  
ビジョンにある「主体性」とはということ  
かを、園での子どもの様子を通して紹介


日時：平成28年12月9日(金)  
場所：城南会館  
ビジョンの中にある「主体的な遊びと体験」を園での子どもの様子を通して紹介

小学校 総合的な学習「ぼくわたしの未来」授業：  
保育士による説明 平成28年6月21日(火)  
0～5歳の子どもたちが学び、生活する姿を見せながら、発達や保育者の仕事について紹介

子どもを主体とした保育 概要				
<p><b>(1)公開保育、カンファレンス</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>園の公開保育と事後のカンファレンスに参加し、学び合う</li> <li>参加者に子どもの姿を記録してもらい、公開園に返す</li> </ul> <p><b>(2)参加型の研修(ドキュメンテーション、記録)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各園で書いているドキュメンテーションを元に保育や遊びの中の気づき、学び、保育者の関わりなどをワークシートを活用してグループで語り合う</li> <li>各園の保育のリーダーとなる保育者を対象に、園内研修の方法やリーダーの役割について学ぶ</li> </ul>				
園名	日時	参加人数	研修内容	
舞鶴幼稚園	平成28年6月17日(木)	午前	47人	公開保育、カンファレンス
		午後	37人	講義「ドキュメンテーションとは」グループワーク:事例記録の検討
	平成28年7月14日(木)	午後	24人	講義「公開保育指導案について」グループワーク:事例記録の検討
朝来幼稚園	平成28年7月15日(金)	午前	34人	公開保育、カンファレンス
		平成28年9月12日(月)	午後	29人
うみべのもり保育所	平成28年9月13日(火)	午前	49人	公開保育、カンファレンス ※視察あり
		平成28年10月20日(木)	午後	31人
タンポポハウス	平成28年10月21日(金)	午後	44人	公開保育、カンファレンス
さくら保育園	平成28年11月10日(木)	午前	39人	公開保育、カンファレンス
		午後	18人	講義「保育のリーダーの役割」グループワーク:事例記録の検討

保幼小連携:概要			
<p><b>(1)管理職研修</b></p> <p>保育所、幼稚園、小・中学校の園長、校長 他</p> <p><b>(2)小学校教育研究会生活科部と合同研修</b></p> <p>協力園、校の担任同士で連携活動プランを立てる</p> <p><b>(3)連携活動の公開授業・保育、カンファレンス</b></p> <p>市内の協力園と学校の5歳児と1年生の連携活動を公開し、事後のカンファレンスを実践者と参加者が共有し、学び合う</p> <p><b>(4)研修:実践交流</b></p> <p>市内の協力園と学校の5歳児と1年生の連携活動を記録したものをもとに実践交流</p>			
タイトル	日時	参加人数	研修内容
管理職研修	平成28年8月17日(水)午前	80人	講演「学びと育ちをつなげる連携教育～遊びから学びこみへ 記録と発信の重要性～」
小教研生活部と合同研修	午後	54人	講義「子どもの主体性が発揮される活動づくりのポイント」グループワーク:連携協力園・校と生活科「たのしいあきいっはいで」での交流活動案づくり
中舞鶴小学校中保育所中舞鶴幼稚園	平成28年11月15日(火)午前	58人	公開授業・保育カンファレンス
実践交流会	平成29年1月25日(水)午後	51人	グループ交流:実践交流 講義「生活科における記録と可視化」(仮)
※今年度より、3回連続研修という形式で、5歳児と1年生の職員が学び合える場を設定する			



保幼小接続カリキュラム策定検討会議 メンバー		
<p>会長:溝邊 和成(兵庫教育大学大学院)</p> <p>私立保育所園長代表2名、私立幼稚園園長代表2名</p> <p>同保育士代表2名、幼稚園教諭代表各2名</p> <p>公立保育所・幼稚園長各1名、同保育士各1名</p> <p>小学校長代表1名、小学校教諭代表2名(全14名)</p>		
 <p>保育所・幼稚園等の関係団体から代表者を選出</p>		
保幼小接続カリキュラム策定のスケジュール		
日時	内容	場所
平成28年8月17日(火)	保幼小連携研修への参加 講演「学びと育ちをつなげる連携教育～遊びから学びこみへ 記録と発信の重要性～」	市政記念館
平成28年10月28日(金)	・乳幼児教育ビジョン、小中一貫教育標準カリキュラムの説明 ・溝邊 和成先生より講義 ・意見交換	市役所 中会議室
平成28年12月15日(木)	・前回のまとめの報告 ・接続カリキュラムのイメージを共有 ・グループ協議	市役所 大会議室
平成29年2月27日(月)	講演「次期改訂学習指導要領と幼稚園教育要領について」(仮題) 文部科学省 田村 学視学官 シンポジウム:溝邊和成会長、田村学視学官	商工観光センター
<ul style="list-style-type: none"> <li>1年目は保幼小連携等について研修、意見交換</li> <li>2年目、具体的な議論と事例収集</li> <li>3年目接続カリキュラム策定、実践</li> </ul>		

2 子どもを主体とした保育(プロジェクト型保育) 報告

今年度の公開保育の様子や学んだことを事務局から報告した後、実施された5園に公開後の変化や課題などをお話いただき、北野幸子先生よりコメントをいただきました。

舞鶴幼稚園

 <p><b>5歳児 言葉による伝え合い 思考力の芽生え</b></p> <p>・自分の思いや考えなどを伝える相手や状況に応じて分かるように話す ・多様な関わりを楽しみ、予想したり、確かめたり、振り返ったりして興味や関心を深める</p>		 <p><b>4歳児 言葉による伝え合い 豊かな感性と表現</b></p> <p>・感じたことや思い巡らせたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しむ ・イメージや思い巡らせたりしたことなどを言葉で表現する</p>	
 <p><b>3歳児 思考力の芽生え</b></p> <p>五感を使って、感じる、試す さらに…ごっこ遊びへ</p> <p><b>身近な環境に積極的に 関わり、自分から気付 いたり発見を楽しむ</b></p>		<p style="text-align: center;"><b>学んだこと</b></p> <p>遊びと遊び、子どもと子どもをつなぐ環境</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✧何をどこに置くのか?...テントの位置、ベンチ、机の位置</li> <li>✧遊びの動線を考える</li> <li>✧室外の遊びと室内の遊びが見えるように</li> <li>✧各保育室を近くに</li> </ul> <p>遊びを支える保育者の関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✧どこまで関わるか、どこで引くのか?</li> </ul> <p>子どもが評価者である やってみて子どもがどう変わるか試してみる</p>	

【事務局より】  
 ◎園庭の砂場では、5歳児たちが樋をつなげて高低差をつけて水を流そうと試行錯誤。樋をつなげることに必死な子どもと、高低差をつけようと試みている子どもの思いがすれ違う場面もあり、そこにいた保育者の関わりについて議論。  
 ◎4歳児が遊具の間をくぐり抜ける三輪車のコースを作り、信号機が設置されたり、そこにガソリンスタンドができたりにしていた。ガソリンスタンドの位置(テント、ベンチなど)やスタンドに必要なものを作るコーナーをどこに置くか、遊びが見えるように、つながるように考える。  
 ◎3歳児は、部屋の前の色水遊びコーナーで花を使って色水を作ることを楽しんでいる。砂場では、裸足で泥の感触を楽しんでいる子やまごごっこを楽しんでいる子がいる。昨夜の雨でできた水たまりでろんこ遊びを楽しむ子、それぞれが

好きな場所で好きな遊びを選んで、その遊びはそれぞれ遠すぎて互いに見ることができていない。  
 ※学んだことは図参照

【5歳児担任より】  
**Q：公開保育後変わったことは？**  
 ◎環境について話し合うきっかけになった。  
 公開保育を受け助言をいただいたことで今私たちが一番に考えていかなければならないこと、それが環境であるということが明確になり、的をしぼって話し合うことができました。  
 ◎具体的な助言をもらって方向は見えてきた。  
 環境について話し合いを進めるにあたって、どんなところに着目したらよいのかということをご導き出させていただきました。  
 一つ目は園庭と室内との遊びのつ

ながり、二つ目は遊びと遊びのつながり、三つ目は年齢を越えたつながり、これらの三つの項目に基づいて、今の子どもたちの遊びや生活の様子を出し合い、各担任が考えるねらいを達成していくためにはどのような環境にしていけばよいのか、意見や思いを交換しました。更に、方向が見てくることによってカリキュラムのねらい、内容がより具体化し、保育のプレが少なくなったように思います。

**Q今後の課題は？**  
 ◎環境をどう構成するか？  
 3つのつながりの根っこにあるものは、保育室という環境にあるのではないかとこの環境に辿りつきました。今、4、5歳児クラスは2階で生活をしています。3歳児は1階です。例えば、保育室をすべて1階におろしてみる、そうした場合のメリットとデメリットを出し

合ってみました。

今年度の子どもたちの現状からいうと、年度途中から保育室をかえても5歳児にとってはメリットがある、それは環境の変化に順応できる力、そして、遊びをつなげていくであろう発達が見られる、しかし、4歳児は支援を必要とする子ども達がいるため、保育室がかわることで今まで積み上げられたものが、どのように変わっていくだろうかという不安要素も出てきました。でも、やってみないとわからない、しかし、やってみて、また戻すことは子どもたちにとって大きな負担となる、保育者はまたここで悩みました。

そんな中出てきたのが、1階にみんなで使う製作ルームを作ってみようという案です。そのねらいとしては、作ることが好きな子どもたちなので、そこに来ると自分たちの作りたいものを作り、異年齢児の作る姿を見ることで思いを

伝え合いながら一緒に作ることを楽しむことにありました。ここで、年齢を越えたつながらにならないかと考えました。

◎遊びと遊び、子どもと子どもをつなげていく

季節のものを使い楽しんでいた色水遊び、その隣に泡遊びができる机をくつつけてみました。すると、すぐに泡ジュースが完成、そして、すぐにそばにある砂場でできたケーキの上に泡をのせると特製泡ケーキができました。そこから、遊びと遊びがどうつながっていくのか、私たちはどうつなげていきたいのかを話し合いました。ちょうどその頃、1階の製作ルームが始まっていたお店やさんごっこ。天気の日には、テントを出して外でもお店をオープン、そうすることで室外と室内の遊びが見えるようになりました。すると、泡ジュース屋さんが開店し、ケーキ屋さんでもできました。そして、異年齢児とのやりとりが増

えてきました。

遊びの動線を考え、話し合うことで製作ルームとしてのねらいは達成できたのではないかと思います。遊びと生活のつながりは途切れてしまうという反省が出てきました。保育室のことも含めて、次年度の課題になってくると考えます。

#### Q 公開保育の時期、方法について

6月という時期は1年が始まったばかりで、公開保育に向けて園内研修や話し合う時間が十分にとれず、気持ちに余裕もなかったのですが、1年の始めに助言をいただくとその後の改善や充実につながるとも感じます。

カンファレンスでは、質疑応答といっても参加者の方に伝えるところまではいきません。せっかく見ていただいたのに残念に思うところもあるので、子ども達との振り返りのように顔を見ながら、ディスカッションできるとよいと感じました。

#### 【北野幸子先生コメント】

- ◎学習指導要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針の改定の意図は、カリキュラムをマネジメントすることにある。
- ◎一人ひとりが、各園がどうしていくか、変えるのか変えないのか、どう変えるのか、もっとこうしたらという建設的な議論が大事。変革を期待したい。

## 朝来幼稚園



5歳児  
思考力の芽生え  
言葉による伝え合い

- ・自分の思いや考えなどを伝える相手や状況に応じて分かるように話す
- ・多様な関わりを楽しみ、予想したり、確かめたり、振り返ったりして興味や関心を深める



4歳児  
協同性  
自然との関わり、生命尊重

砂・水・泥に進んで関わり、自分なりに考えて試したり友だちのアイデアを取り入れたりしながら工夫して遊ぶ



3歳児  
思考力の芽生え

身近な環境に積極的に関わり、自分から気付けたり、発見を楽しむ



### 学んだこと

- 3歳：枠にはめずに自由に
- 4歳：友だち同士でイメージを共有
- 5歳：協同的な遊び
- 年齢ごとのねらいを意識した保育者の関わり
- ☆予測や手順、結果が違っても、子どもの姿を認める肯定の言葉
- ☆興味を持っている内容の近い子ども同士をつなげるためお互いを意識できる言葉がけ
- 行為目標や結果目標ではないものがねらいになることが大切である
- ◎遊びのプロセスとねらい、学びを保育者は意識できたかどうかよりも、やってみよう意欲、創意工夫やなんだろう、不思議だなあという気持ちを育てる

【事務局より】

◎5歳児は、シャボン玉遊び、それぞれのグループでどうしたら大きいシャボン玉ができるか液の調合から始める。シャボン玉に棒をさしても壊れないことや地面についたシャボン玉が壊れないことに気づき、不思議に感じて何度も試したり、走ること風を受けながらシャボン玉ができるのを楽しんだりしていた。  
◎4歳児は、船をつくりたいという明確な目的を持って、協同的に子どもたちが会話をしながら船づくりを

進めていた。砂がどうしたらくっつくのか、土の種類や水との配合など工夫する姿も見られ、そのことを子ども同士で伝え合い共有する場面も見られた。

◎3歳児は、砂、土、泥、水を存分に感じて遊ぶ様子が見られた。まだまだ、感触遊びの体験も少ないので、どんどん楽しむことが大事。

※学んだことは図参照

【5歳児担任より】

Q 公開保育をしてよかったこと

◎自分自身の学びになった。

◎振り返り、見直しの機会になった。

◎公開の子ども記録をとってもらい、いつもと違う姿に気づけた。

Q 公開後、課題と感じていること

◎行事に追われてしまい、遊びが途切れてしまう

Q 今後やってみたいこと

◎作った物でもっと遊んでほしい。

◎作品展だから決まったものを作るのではなく、上手下手よりも子どもの発想で作ったものにしていきたい。

【北野幸子先生コメント】

◎思考力は、意図的であっても自明性、必然性があり、自己発揮しているときに育つ。  
◎変化することは怖い、チャレンジすることを楽しみながら、遊びを継続、発展させていく。  
◎その子にとって楽しいこと、気持ちの洞察をはかり、行事の見直しを子どもとどこまでできるか、今まで通りでなくてよい。

うみべのもり保育所

<p><b>乳児</b> さまざまな感触を感じる、 試す～五感を使って～ 保育者との応答的なやりとり</p>  	<p><b>3～5歳児</b> <b>思考力の芽生え</b> 五感を使って、泥や土の性質を感じる、知る それぞれが集中して…</p>   <p>身近な環境に積極的に関わり、自分から気付いたり、発見を楽しんだり考えたり、不思議に思ったことなどを探究するようになる</p>
<p><b>3～5歳児</b> <b>協同性</b> イメージを共有し、友達と いっしょに考える、試してみる</p>   <p>友達との関わりを通して、互いの思いや考えなどを共有し、それらの実現に向けて、工夫したり、協力したりする充実感を味わいながらやり遂げる</p>	<p><b>5歳児</b> <b>協同性</b> 役割を分担し、協力し合う 気づき、発見を表現する、伝える</p>   <p>友達との関わりを通して、互いの思いや考えなどを共有し、それらの実現に向けて、工夫したり、協力したりする充実感を味わいながらやり遂げる</p>
<p><b>学んだこと</b> 安心できる居場所、応答的な関わり ❖遊びたいおもちゃがあり、自分で選んで自分の場所で遊ぶ。 ❖子どもが保育者の顔を見たら表情豊かに応答。子どもは、しゃべってなくてもいっばい気持ちを伝えようとしている。肯定語、受け止める言葉。</p>	<p><b>学んだこと</b> 環境構成～いつでも、どこでも、何度でも～ ❖今日の遊びの姿から明日の環境構成へとつなげる。 ❖保育室、園庭、廊下、遊戯室などの場所、人、ものをどうつなげるのか？ 振り返り～質問の構造化～ ❖対保育者ではなく、子ども同士のやりとりへ ❖答えやすい質問から始め「やってみてどうだった？」考える質問へ「なぜ、そうしたの？」</p>

【事務局】

◎乳児では、子どもの年齢や興味・関心にそった遊びの環境（自分の安心できるスペース）が大事。保育者の（子どもが保育者の顔を見た時しっかり視線を合わす、思いを言語化・・・）応答的な関わりの重要性。五感で感じるスライム、泡遊びのねらいには、素材そのものや変化や違いを感じることで、保育者とのやりとりを通じて言葉の獲得やコミュニケーション力の基礎を育みたい。

◎3～5歳児では、一人一人が自分の興味のあることに集中して遊ぶ、友達と一緒に同じ目的を持ってイメージを共有して遊ぶ、のどちらも必要。この写真は、子どもが体や手、足を使って泥や土を感じている姿。考え試したり、自分なりの目的を持って、黙々と自分の遊びに集中している。

◎友達と意見を伝え合いながら、工夫し、試行錯誤の様子。遊びを通じて、自分の思いを伝え、友達の思いを聞く経験を重ねることで、話し合い、折り合いをつけていくことも学ぶ。今日の遊びから、次の日への遊びへどうつなげるのか？環境構成はどうするのか？

◎クラスのみんで共有するための振り返り。対保育者ではなく、子ども同士のやりとりへ。答えやすい質問から始め「やってみてどうだった？」考える質問へ「なぜ、そうしたの？」

※学んだことは図参照

【主任より】

Q 公開保育を受けてよかったこと

公開保育は自分達の保育や環境を

見直す機会となり様々な視点から助言をいただくことで保育の質向上への原動力となりました。

保育者自身が公開保育を受けて良い変化だと感じていることはクラスの担任間はもちろんのこと、異年齢のクラス間でも話し合いをする機会がとでも増えたことです。担任間では、子どもの姿を共有することで、一人一人の子どもが何をしていたのか、どんな興味があるのかを丁寧にじっくりと見ていくことにもつながり、どの職員も同じ思いで子ども達に関わっていくことの大切を再度確認することができました。

また、自分のクラスだけでなく、他のクラスとも子ども達が今、何に興味があるのかを共有することで、他クラスの子どもの様子や思いがわかり、子ども同士、遊びと遊びをつなげることを意識するようにもなってきました。

より多くの職員で子どもの姿を共有し環境設定の見直しや、遊びの展開について話し合う機会が増え、何を大切に保育をしていくかを共有することができたことは成果ではないかと思っています。

Q 公開保育で学んだこと

今回の公開保育で、あらためて、年齢発達に合わせて、子どもの姿、興味・関心から環境構成することの大切さを実感しました。

おもちゃの種類、数は年齢発達にあったものか？特におもちゃの場所や置き方については、配置次第で一人一人の遊びがじっくりできるものであったり、保育者や友達と共

感しながら遊べたり、協同的な遊びにつながったり…ということを意識しながら環境を整えていくようになりました。

また、遊戯室や廊下の使い方についても、それぞれの遊びをどうつないでいくかという意識を持ち、環境構成することや、子どもの視点ではどういった環境が必要であるかも学び、子ども、遊びをつなぎ、パブリックスペースをどのように活用していくか試行錯誤しながらすすめているところです。

2歳の泡遊びの中では、「やりとり」や「みたて」だけでなく「素材を感じる」「楽しむ」ということがねらいとしてあってもよかつたということや、3歳児の遊戯室での遊びのイメージがなかつたというご指導もいただき子どもの姿をもとに年齢発達に応じたねらいをたて、子どもの姿から遊びの予測を考えていくことが大切だということを改めて実感しています。

Q 今後やってみたいこと

現在、少しずつ取り組んでいるところではありますが、「幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿」を視点に取り入れたドキュメンテーションの作成にさらに取り組んでいきたいと考えています。



また、現在行っている遊びの一場面を切り取る形でのドキュメンテーションから、個人に注目しドキュメンテーションの作成にも取り組み、個人の学びや育ちを深く見取っていくということにもつなげていきたいと考えています。

【北野幸子先生コメント】

◎多くの研修を構成的に研究し、これからの乳幼児教育の全体の流れを意識していく。  
◎「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」を意識したドキュメンテーションの研究を進めてほしい。

タンポポハウス

 <p>乳児</p> <p>感触～五感を使って～試す、見立てる</p>	 <p>3～5歳児 協同性 豊かな感性と表現</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちと関わりを通じて互いの思いや考えなどを共有し、それらの実現に向けて工夫したり協力したりする充実感を味わいながらやり遂げるようになる</li> <li>・感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わう中で、意欲を高める</li> </ul>
 	

 <p><b>3～5歳児 協同性 豊かな感性と表現</b></p> <p>・友だちと関わりを通じて互いの思いや考えなどを共有し、それらの実現に向けて工夫したり協力したりする充実感を味わいながらやり遂げるようになる ・感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わう中で、意欲を高める</p>	 <p><b>5歳児 協同性 豊かな感性と表現</b></p> <p>・友達との関わりを通じて、お互いの思いや考えなどを共有し、実現に向けて工夫したり協力したりする充実感を味わいながらやり遂げる ・感じたことや思い巡らしたことを友達と一緒に工夫して創造的な作品を生み出す</p>
<p style="text-align: center;">学んだこと</p> <p><b>環境～空間、機能、素材を考える</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもがどう遊ぶか、どう使うかを考える。 (道具は出してきて使うのか、置いてあるのを使うのか...など)</li> <li>つながりを意識した空間</li> <li>遊びをつなげるために置いておく空間、明日も続きができる環境も大切。</li> </ul>	<p style="text-align: center;">学んだこと</p> <p><b>遊びを支える保育者の関わり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>遊びは“こうしなければならない” “こうして遊ぶ”と決まっていない。子どもがどう遊ぶかをよく見る。</li> <li>保育者が楽しむ姿を見て子どもはまねをする。 子どもがどうしたいのか、どう感じているかをよく見て、考える</li> </ul>

【事務局より】

◎1、2歳児の子どもたちが、片栗粉粘土や寒天などの素材の感触を十分に楽しみ、そこから見立て遊びへつがっていた。様々な種類の透明容器やガス台、なべ、お皿など見立て遊びがイメージしやすい環境を準備。

◎絵具を使って、色遊びや感触遊びを楽しんでいた。描くこと、作ることが使うことに段々とつながっていくこと、塗る楽しさだけで終わらず、作る楽しさで終わらないことも大事。

◎自分なりのイメージを持って、製作を楽しんでいた。一人のイメージを友達と共有することで、製作のアイデアや工夫も広がっていく。

◎5歳児になると段ボールなどの素材を使って、大きなものを友達と一緒に作るようになってくる。協同的な遊びの中で、自分の意見を主張したり、友達の意見を聞いたり、更に、相談して決定したりする力をつけていく。遊びがねらいではなく、その中で何を育てていくかが重要。

※学んだことは図参照

【5歳児担任より】

公開保育を受けさせて頂いたことで、クラスを越えての交流もより多くなり共に過ごす心地良さを感じる機会が増えたように思います。

今回1,2歳児は合同での活動を公開したことで保育者も子どもも一緒に過ごす機会が増え、良いきっかけとなりました。

3,4,5歳児は週1回の仲良しデーという縦割り保育を見て頂きました。これまでの遊びでは危ないことや慣れないことなどは前もって制限してしまうことも多くあったのですが、それでは子ども自身が何も気付けないと感じ、止めすぎると待つことを心がけたことで保育者も一緒に楽しむことが増えてきました。

制限しないということから、午後からの遊びの時間を子ども達自身が選んでいけるようにしています。そのことによって特に年長児では、製作あそびをじっくりと楽しみ準備等も子ども達自身考え

て行うようになり、遊びをより発展できるようになったように思います。

作られた物の中には何を作ったかわからないものもありましたが、子どもはそれで満足をしていて見栄え等は関係なくそういうものもありなんだという気付きにつながりました。

公開保育の後のカンファレンスで「ダンボール遊びをもっと広い空間では」というご意見を頂き、それを参考に園庭で広げて遊んでみました。するとキャタビラーにしたり自分たちでつなげたり、台所やお風呂に見立て遊ぶ姿も見られ、室内の時より、より大胆に空間を使い楽しんでいる姿があり、また続けていきたいと思いました。

今は作ったものを置いておける空間も少なく遊びが途切れてしまうので、今日の遊びを明日も続けるための環境や作った物を置いておける場所を用意できれば、と考え今後の課題としています。

**【北野幸子先生コメント】**

◎安心、安全は大前提。

◎禁止、リスク、マイナスを採すことでなく、あれもダメ、これもダメという発想から、これもできるかもしれない、あれも大丈夫かもしれないと変わろうとしていただいたことは大事。

◎なぜ保育には時間割がないのかも考え、保育や遊びをつくってほしい。

## さくら保育園

 <p><b>乳児</b></p>  <p>それぞれが好きな遊びを見つけ て遊べる環境 五感を使って… 保育者との応答的なやりとり</p>	 <p><b>3歳児</b> 豊かな感性と表現</p> <p>生活の中で心動かす出来事に触れ、感じたことや思い巡らしたことを自分なりに表現したり、保育者や友達と一緒に表現することを楽しむ</p>  
 <p><b>4歳児</b> 社会生活との関わり 協同性</p>   <p>経験により得た日常生活の体験を模倣・再現して楽しむ 友達との関わりを通して、互いの感じ方・考え方などに気付き、楽しみながら一緒に遊びを進めていく</p>	 <p><b>5歳児</b> 協同性 思考力の芽生え</p>  <p>・互いに思いや考えなどを共有し、それらの実現に向けて工夫したり、協力したりする楽しさや充実感を味わいながらやり遂げるようになる ・友達などの様々な考えに触れる中で、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、よりよいものにしていくとする</p>
<p style="text-align: center;">学んだこと</p> <p>子どもが好きな遊びを見つけ、自分で遊びをつくり出し、思う存分夢中になれる環境と時間</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✿保育者が子どもの興味や関心を見ようとする 子どもの思いを支える</li> <li>✿時間や空間を制限しない (明日も続けられる環境と十分な時間)</li> </ul>	<p style="text-align: center;">学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✿より興味や探究が深まるフィールドワーク</li> <li>✿指示や提案ではない言葉かけをするには、子どもの創意工夫を見つける</li> </ul> <p style="color: red;">子どもの興味・関心をもとにした遊びに保育者のねらいや子どもの育ち・学びを意識して入れる。</p>

### 【事務局より】

◎乳児の環境には、色・形・動き・触覚など、五感を意識した心地よい空間が大事。小麦粉粘土や米粉粘土などの感触遊びから、見立て遊びを引き出すための（容器の数、道具など）環境も大事。

◎3歳児は、それぞれ自分なりにイメージしたものを作ったり、作ったもので遊んだりしていた。異年齢の子の姿をよく見ており、影響を受けている。時には、保育者がモデルとなり、一緒に遊びに入ることも大事。

◎4歳児は、2～3人と4～5人の小グループがあり、それぞれそれぞれのアイデアや工夫を伝え

合い、新たな製作を楽しんでいた。お互いのイメージを共有するためには、話し合うことが重要。自分の思いを言葉にして伝えることを様々な遊びの中で身につけていくことが大事。

◎5歳児はさらに、大がかりなものを自分たちでつくっている。共通のイメージがあるからこそ、何日もかけて大がかりなものを作り、役割分担も自然にしている。

※学んだことは図参照

### 【園長先生より】

Q保育を見直したことで何が変わったか？

子ども：表情、動き、言葉などが子

ども発信に変わった、作ってみたい意欲（宇宙・お店屋さん・回転寿司・楽器など）

保育者：子どもの姿をよく見る、子どもの言葉に耳を傾ける、保育者同士で話し合うようになった。保護者：「今日、このお菓子箱持って行って電話作ってくる」とか「〇〇ちゃんと先生ごっこした」など毎日したいことを考えて夜過ごしている。・なんでも自分から考えて行動するようになった。

※保護者アンケートより

Q今後やってみたいことは？

◎遊びを広げること

◎子どもを主体とした行事



Q 課題

- ◎子ども主体とした行事とした場合の導入・流れ・当日の進行
- ◎行事が普段の遊び・興味関心が途切れさせてしまう
- ◎保護者への理解簡素化したように感じてしまう行事
- ◎子ども主体＝自由放任＝一年生になれるの？という保護者の思いからの理解

さくら保育園で公開保育を行う上で、職員に話をしていたことがあります。それは、公開保育はあ

くまで通過点であって特別なイベントであってはならないということです。

ですから普段の保育を見てもらおうと。公開保育が終わったら元に戻るようなものにならないようにと言っていました。

保育を見直したことで一人一人の言葉に耳を傾けるようになりました。先生からの一方的な指導ではなく、子どもたちからわき出る興味関心に気がつけるようになってきました。

子どもたちは活動を始めるとい

ろんなアイデアが出てきて活動が広がり始めます。

そこで課題になるのが行事です。行事は普段の子どもの成長を見ていただける機会なので、とても重要ですが、つつい行事のための練習・行事のための準備に時間が費やされます。

せっかくの子どもたちの興味の広がりも行事を通過することで断ち切れてしまいます。

保育者の思いと保護者理解との間で担任は頭を抱えてしまいます。

<p>公開後 その後1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎電車作りと家づくりの4歳児</li> </ul>  <p>園児が行った焼き鳥屋さんに興味がある</p>  <p>電車に飽きてきて園庭へ</p>  <p>1・2歳児の遊び場になりました</p> 	<p>公開後 その後2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎お店屋さんと宇宙に広がった5歳児</li> </ul>  <p>プラネタリウムは</p>  <p>家になりました</p>  <p>ファッション雑誌を作りたい</p>  <p>雑誌完成</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分の着たい衣装作り</li> </ul>
	
<p>公開後 その後3</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ギター作りとドラム作りに集中していた3歳児</li> </ul>  <p>誕生会で披露</p>  <p>クラスで発表</p>  <p>年長児にも発展</p>  <p>年長児とセッション</p> 	

今回は公開保育での心構えとして公開保育は終点では無く、通過点であるということを紹介したかったです。子どもたちの興味関心は常に動いており、一つのことが長く続くことはあまりありませんでした。

公開保育時にピークだった電車もピークが過ぎ壊れかけてきたので、園庭に出して最終は処分しようと思っていました。園庭に出すと、今まで興味はあったけど遊べなかった1・2歳児が我先にと電車で遊び

始めました。これもとてもいいことのように感じました。

また、部屋では焼き鳥屋さんやパターゴルフに興味は移っていました。

年長児はお店屋さんや宇宙から、ファッション雑誌作りにかわり、興味のある子どもたちが自分の着たい衣装を作り写真を撮って雑誌を作りました。

ギター作りやドラム作りをしていた3歳児は、クラスで楽器の発

表すると、年長児に派生してコラボで保育室コンサートが始まりました。

そこから年中児にも派生したので、お誕生会でみんなに披露することになりました。

それからのドラム作りは発展し、とても素晴らしいドラムもできあがりました。

#### 【北野幸子先生コメント】

◎4年間来させていただいてよかった。

4年前と園長先生の印象が違う。保育を楽しんでおられる姿が印象的。

◎他の園の公開にも毎回来られ、園長先生が変わってこられリーダーシップを発揮されていることがわかる。

◎行事について、日ごろの保育（遊び）が行事につながる事が大事。

◎公開保育の参加者からも、園にいて楽しいという声がたくさん聞かれた。

◎これからの保育、子どもを主体とした保育に期待したい。

### 3 保幼小連携 報告

保幼小連携研修、保幼小中連携研修について事務局より報告の後、公開校・園より報告をしていただきました。

<h4 style="text-align: center;">保幼小連携の目的</h4> <p>○ 連携協力校・園での生活科の連携活動の実践交流を中心として、お互いの理解を深めながらそれぞれの「ねらい」を持った連携活動の充実に向けて研修を深める。</p>	<h4 style="text-align: center;">取組の内容</h4> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 「保幼小連携協力校・園」での年間計画の作成・推進・評価</li> <li>② 生活科での交流授業の実施 (モデル校・園の指定・・・中舞鶴小学校・中舞鶴幼稚園・中保育所)</li> <li>③ 保幼小連携研修会の開催(3回)</li> </ol>
<h4 style="text-align: center;">保幼小連携研修の流れ</h4> <p style="text-align: center;">～全ての小学校区で連携活動の充実を図る～</p> <p>8月17日PM 保幼小連携研修会(指導案作成研修)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>11月15日 保幼小連携公開授業・保育研究会 (中舞鶴小学校、中舞鶴幼稚園、中保育所)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>1月25日 保幼小連携研修会(実践交流会)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">市内の保育所・幼稚園・小学校教員が参加</p>	<h4 style="text-align: center;">保幼小連携研修会(生活科指導案作成研修)</h4> <p>8月17日(水) 市政記念館ホール ※小学校教育研究会生活科部と共同開催</p> <p>講義 「子どもの主体性が発揮される活動づくりのポイント」 鳴門教育大学大学院 木下 光二 教授</p> <p>グループワーク 1年「たのしいあきいっぱい」の交流活動プランを立てよう</p> <p>・連携協力校・園で交流活動プランを立てる ★互恵性のある連携には ★継続的なつながりを持たせて ★主体性を引き出す環境構成</p> 
<h4 style="text-align: center;">保幼小連携 生活科公開授業・保育研究会</h4> <p>11月15日(火) 舞鶴市立中舞鶴小学校 体育館</p> <p>中舞鶴小学校 1年生 中舞鶴幼稚園 年長児 中保育所 年長児 「たのしいあき いっぱい」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・連携協力校・園で計画的に実施</li> <li>・互恵性のある連携</li> <li>・教師にどんな変革が生まれたか 幼児教育に何を学んだか 小学校教育に何を学んだか</li> <li>・環境構成の大切さ</li> <li>・子どもの学びを可視化する (記録と考察)</li> </ul>  <p style="text-align: center;">どんぐりを転がして遊ぶゲームをペアで考えるよ。</p>	<h4 style="text-align: center;">保幼小協働による実践シートの作成</h4>  <p>実践シートには、活動の様子や子どもの発言、教師の問いかけなどが記録されています。</p>
<h4 style="text-align: center;">講義</h4> <h4 style="text-align: center;">「遊びと学びの可視化について」</h4> <p style="text-align: center;">—保育・教育の質、記録と発信の重要性— 鳴門教育大学大学院 木下 光二 教授</p> 	<h4 style="text-align: center;">学んだこと</h4> <ul style="list-style-type: none"> <li>・両方にとって達成感や自己実現のある連携活動に。「〇〇してあげる」→「いっしょに〇〇する」</li> <li>・結果よりもプロセス。プロセスの中に学びがある。</li> <li>・学びも育ちも個を大切に。「木も森も見よう。」</li> <li>・可視化することで、つなぐものが見えてくる。 子どもの事実(写真・ビデオ・会話やつぶやきのメモ・・・)</li> <li>・幼・小が同じ活動を見て記録を取り、すり合わせる。 →教育観の相違から学び合う。</li> <li>・子どもが豊かに考えていることに耳を傾ける。 →子どもらしい学びが見とれる目。</li> </ul>

## 保幼小中連携研修会

8月17日(水)

市政記念館ホール

講演

### 「学びと育ちをつなげる連携教育

～遊び込みから学び込みへ 記録と発信の重要性～

鳴門教育大学大学院

木下 光二 教授

市内の保育所・幼稚園・小学校・中学校教員が一堂に会して

2月27日(月)

講演

「次期教育要領・学習指導要領から考えるこれからの教育  
～主体的・対話的で深い学び～」

文部科学省初等中等教育局 田村 学 視学官

## 成果と課題

○連携協力校・園を設定することで、どの小学校区でも年間を通じて連携活動が行われるようになり、回数を重ねる中で、お互いの理解が深まる実践も見られるようになってきた。

○PDCAサイクルでの研修により、生活科の交流活動について、具体的に研修することができた。

○民間・公立の保・幼・小・中全体で研修する機会を持ち、0歳から15歳までの切れ目ない質の高い教育に向けて、連携教育の意義を共有することができた。

●連携から接続へ。園・学校全体で共通理解し、カリキュラムとして連携教育を位置付ける。

## 中舞鶴小学校

【1年生担任より】

今年度は本事業を受けたこともあり、年間を通して、幼稚園、保育所と連携を進めていくことになりました。大きな取組としては、2学期の「なか・あきフェスティバル」でしたが、様々な取組を一緒に行う中で、子どもたち同士のつながりが強まるのではないかと思います。1学期から3学期までを通じた交流を計画しました。

「なか・あきフェスティバル」では、材料集めをペアと一緒にするところからスタートをしました。どんぐりや木の葉を集める中で、多くの言葉を交わし、いっしょに遊びながら楽しい時間を共有することで、少しずつ打ち解け、仲良くなっていく様子が見られました。

1回目の共同製作は、作る物を決めずに製作を始めました。作る物を限定してしまうと、意欲を持って作っていけない子もいるかもしれない、という配慮から、まずは、どんな遊び方をするのか観察をしました。すると、子どもたちは、秋の自然物から豊かな想像力を膨らませ、いろいろな遊びかたを思い付き遊びはじめました。木の枝を使ってドングリを釣って遊ぶ子、雨どいを使ってドングリを転がし遊ぶ子、服

を作って、葉っぱや木の実で飾り付けをする子、マラカス、ギター、太鼓等の楽器を作って演奏する子など、教師も想定しなかった様々な遊びの姿が見られました。自分のやりたいことを自分で決めていくので、どの子も意欲的に活動する様子が見られました。しかし、中には自分が楽しむことが最優先になってしまい、ペアの子をほったらかしにして遊んでいる子、自分一人ですんでいる子もいました。小学校では、活動が終わるたびに振り返りをして、より良い活動になるように話し合いをしました。子どもたちの中から出てきたのは、「もっとたくさんペアと話をする」ということでした。話し合いをしたら、新しいアイデアが生まれ、ペアの園児ともさらに仲良くなれるから、たくさん話したいと目標を持って、次の共同製作に向かいました。

2回目の共同製作からは、教え合いなどの子ども同士のつながりが生まれるように、コーナーを4つに設定し、子どもたちの興味関心から自由に選ばせるようにしました。子どもの遊び方を見てみると、1つの遊びをとことん追求するペア、どのコーナーにもまんべんなく参加するペアがいて、様々な楽しみ方が見られました。



協同性

同じ空間を共有することで自然と生まれる安心感・信頼感

1年間の取り組みの中で、大切にしてきたことや学んだことをまとめたいと思います。

1つめは、「子どもに主体性をもたせること」です。そのために、子どもたちが夢中になり、みんなを取り組みたいと思えるテーマの設定や、場の設定が大切だと学びました。子どもたちの「こんなことをしてみたい」「こんなことができたらいいな」という思いが活動を進める強いエネルギーになるので、子どもたちの思いを生かし、テーマを設定するように心がけました。また、準備しすぎて、子どもの活動を制限することになってしまうので、子どもが自分自身で選択し、他のもので代用できるものはないかと考える部分を作っておくことも必要だと感じました。



思考力の芽生え

互いの思いや考えなどを共有し、工夫したり協力しながらやり遂げようとする



豊かな感性と表現

異なる素材の特徴を生かし、組み合わせるイメージしたものを作り上げようとする



言葉による伝え合い

自分たちが活動の中で満足感・達成感を感じ自信を得る  
自分たちの考えたことや楽しんだことを、相手に分かりやすい言葉で表現しようとする

## 中 保 育 所



### 【5歳児担任より】

私自身、5歳児クラスを担当するのが初めてであったため、まずは今までの連携活動の内容を保育所の先生や記録から知るということから始めました。その内容は、小学校に招待してもらおうといったイベント的な内容が多く、互恵性のあまり見られない活動でした。

私自身も、小学生に色々なことを教えてもらう、その経験の中で年長児が憧れの気持ちを待つという一方的な活動という認識でした。

今回連携研修や、公開授業・保育を受けることにより、木下先生やいろいろな先生方の話を聞き、自分の

認識の違いに気づけ、また幼稚園・小学校の先生方とたくさん話をすることで、多くのことを学ばせていただくこともできました。

話し合いのスタートは、子どもの興味・関心を起点とした活動となるよう、お互いの子ども達の姿を伝え合うものでした。今思うと…まずは、“お互いの違いを知る”ということは、とても大切であったと思います。

私自身の反省としては、保育所の子どもの姿を伝えるだけでなく、幼児の学びや育ちがあるのかを、具体的に小学校の先生方にお伝えすることができなかったことです。

また、木下先生のお話にもありましたが、連携活動後に子ども達の学びや育ちについて、中舞鶴幼稚園と小学校の先生と、もう少し意見交換・情報交換ができていれば、更に共通理解も深まり次の活動がよりよいものになったのでは？とも思います。

最後に連携活動の場の設定につ

いてですが…。

当日、木下先生から連携活動は小学校の体育館以外でも良かったのでは？とのご指導をいただきました。正直私の中にはない発想でしたが、普段保育所園庭で“樋遊び”を楽しむ子ども達の様子を思い出してみると…より速さを出すための急傾斜作りにジャングルジムを活用したり、うまく転がらない原因が地面の凸凹であると考え微妙な調節をしながら地面を削ったり、より滑らかに転がるのでは？と予測し、さらさら砂と一緒に流してみたり…と、子ども達が主体的に環境に関わり、友達と一緒に試行錯誤を重ね探究する姿がたくさん見られます。今後の活動では、より互恵性のある学びの深い活動となるよう、環境設定また環境の工夫を考慮していきたいと思います。

保育所の子どもの学びが就学後どのように育っていくかを見通した保育を心がけ、なめらかな接続のための連携を今後も進めていきたいと思っています。

## 中 舞 鶴 幼 稚 園

### 【5歳児担任より】

交流するという事で、子どもたちは喜んでいました。しかし、実際に行ってみると、緊張して何も話さない子がたくさんいました。ペアのお友達を決めましたが、1年生が言うことにただ頷くだけだったり、一緒に秋みつけの散歩に行っても、それぞれに見つけ、親しみのある担任に見せに來たりする様子でした。園に帰って「自分の思いを伝えたらいいんだよ」と話をしました。

そこからは、「こうしたい」「どうしたらいい?」と、きちんと自分の言葉で伝えることが増えてきました。1年生も上手に聞き出したり、やさしく教えてくれたことで、ペア同士、会話を楽しみながら、作ったり遊んだりするようになりました。

回数を重ねることで緊張がとけてきて、「してあげる」「してもらう」の関係ではなく「一緒にする」ができるようになり、どの子どもとても楽し

そうで、自分なりに色々考えて、活動をしていました。

そのあとの振り返りの時間には、大勢の前で「はい!」と手を挙げて積極的に意見を言う子もあり驚きました。クラスの中ではできても、学校で発表するのは難しいかなと思っていましたが、どこを工夫したか、どこが大変だったかまで、上手に発表することができました。たくさんの人の前で言えたことは、大きな自信につながり、その後、部屋の中でも積極的に手を挙げるが増えました。

「また行きたい」「楽しかった」「今度は来てほしい」と次の交流を心待ちにし、何度も学校へ行ったことで、就学への不安も減ったようです。

保護者も同じで、場所に慣れて安心です、と言われました。1年生への憧れの思いもあり、入学を心待ちにしてくれればと思います。

交流することは、子どもも教師もお互いに学ぶことが多いので、大切にしていきたいですが、今年度は急に決まったこともあり、バタバタしてしまうことも多く、そこは反省だったと思います。

年度当初に、担任同士がきちんと話をし、子どもの様子や狙いを明確にしたうえで、年間計画を立て、取り組めることが大事だと感じました。



## 4 保幼小接続カリキュラム策定会議 報告

事務局より会議の経過を報告し、副会長より会議の議論について報告いただき、会長である兵庫教育大学大学院溝邊和成先生より今後の方向性をお話いただきました。（こららの報告は、2月27日 保幼小中連携研修会において報告された内容を掲載しています）

<p><b>保幼小接続カリキュラム 策定の主旨</b></p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; text-align: center;"> <p>保育所・幼稚園 環境を通じた遊びや 体験から学ぶ</p> </div> <div style="border: 1px solid green; padding: 5px; text-align: center;"> <p>小学校 教科等の学習を 通して学ぶ</p> </div> </div> <p style="text-align: center; color: red;">↓ それぞれの違いを越えて ↓</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; text-align: center;"> <p>小学校の準備や 先取りではなく...土台</p> </div> <div style="border: 1px solid green; padding: 5px; text-align: center;"> <p>保育所・幼稚園の 延長ではなく...</p> </div> </div> <p style="color: red;"><b>子どもの育ちや発達に合わせた滑らかな段差を！</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎5歳児と1年生の互恵性のある連携活動を行う</li> <li>◎互いの教育の方法を知る</li> </ul> <p style="color: red;">⇒継続していくためには、カリキュラム化が必要</p> <p style="color: red;">※改訂幼稚園教育要領、保育所保育指針においては、幼児期に育みたい3つの力と10の姿が示され、それにつながる資質・能力について次期学習指導要領においても明記されている</p>	<p><b>保幼小接続カリキュラム イメージ</b></p> <div style="border: 1px solid pink; padding: 5px; text-align: center;"> <p>舞鶴市教育振興大綱 ～0歳から15歳までの切れ目ない質の高い教育の充実～ ふるさと舞鶴を愛し、夢に向かって将来を切り拓く子ども</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; text-align: center;"> <p>～乳幼児期～ 乳幼児教育ビジョン</p> </div> <div style="font-size: 2em; color: red;">➔</div> <div style="border: 1px solid green; padding: 5px; text-align: center;"> <p>～小・中学校～ 小中一貫教育 標準カリキュラム</p> </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px dashed blue; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>～接続期～ <b>舞鶴市版</b> <b>保幼小接続カリキュラム</b></p> <p style="color: red; font-weight: bold;">➔ 育ってほしい力 ➔</p> </div> </div> <p style="font-size: 0.8em; color: gray;">※入学前に準備しておく内容や、入学後の時間割などを決めるモノではない</p>															
<p><b>保幼小接続カリキュラム策定検討会議 メンバー</b></p> <p>会長：溝邊 和成（兵庫教育大学大学院）          私立保育所園長代表2名、私立幼稚園園長代表2名          同保育士代表2名、幼稚園教諭代表各2名          公立保育所・幼稚園園長各1名、同保育士各1名          小学校長代表1名、小学校教諭代表2名（全14名）</p> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">  <p style="border: 1px dashed blue; padding: 2px; color: red; font-size: 0.8em;">保育所・幼稚園等の 関係団体から代表者を選出</p> </div>	<p><b>保幼小接続カリキュラム策定のスケジュール</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; font-size: 0.8em;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">日時</th> <th style="width: 60%;">内容</th> <th style="width: 25%;">場所</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平成28年8月17日（火）</td> <td>保幼小連携研修への参加 講演「学びと育ちをつなげる連携教育～遊びから学びこみへ 記録と発信の重要性～」</td> <td>市政記念館</td> </tr> <tr> <td>平成28年10月28日（金） 第1回策定会議</td> <td>・乳幼児教育ビジョン、小中一貫教育標準カリキュラムの説明 ・溝邊 和成先生より講義 ・意見交換</td> <td>市役所 中会議室</td> </tr> <tr> <td>平成28年12月15日（木） 第2回策定会議</td> <td>・前回のまとめの報告 ・接続カリキュラムのイメージを共有 ・グループ協議</td> <td>市役所 大会議室</td> </tr> <tr> <td>平成29年2月27日（月） 第3回策定会議</td> <td>講演「次期改訂学習指導要領と幼稚園教育要領について」(仮題) 文部科学省 田村 学視学官 シンポジウム：溝邊和成会長、田村学視学官</td> <td>商工観光セン ター</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年目は保幼小連携等について研修、意見交換</li> <li>・2年目、具体的な議論と事例収集</li> <li>・3年目接続カリキュラム策定、実践</li> </ul>	日時	内容	場所	平成28年8月17日（火）	保幼小連携研修への参加 講演「学びと育ちをつなげる連携教育～遊びから学びこみへ 記録と発信の重要性～」	市政記念館	平成28年10月28日（金） 第1回策定会議	・乳幼児教育ビジョン、小中一貫教育標準カリキュラムの説明 ・溝邊 和成先生より講義 ・意見交換	市役所 中会議室	平成28年12月15日（木） 第2回策定会議	・前回のまとめの報告 ・接続カリキュラムのイメージを共有 ・グループ協議	市役所 大会議室	平成29年2月27日（月） 第3回策定会議	講演「次期改訂学習指導要領と幼稚園教育要領について」(仮題) 文部科学省 田村 学視学官 シンポジウム：溝邊和成会長、田村学視学官	商工観光セン ター
日時	内容	場所														
平成28年8月17日（火）	保幼小連携研修への参加 講演「学びと育ちをつなげる連携教育～遊びから学びこみへ 記録と発信の重要性～」	市政記念館														
平成28年10月28日（金） 第1回策定会議	・乳幼児教育ビジョン、小中一貫教育標準カリキュラムの説明 ・溝邊 和成先生より講義 ・意見交換	市役所 中会議室														
平成28年12月15日（木） 第2回策定会議	・前回のまとめの報告 ・接続カリキュラムのイメージを共有 ・グループ協議	市役所 大会議室														
平成29年2月27日（月） 第3回策定会議	講演「次期改訂学習指導要領と幼稚園教育要領について」(仮題) 文部科学省 田村 学視学官 シンポジウム：溝邊和成会長、田村学視学官	商工観光セン ター														
<p><b>第1回策定会議</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 保幼小接続カリキュラム策定の主旨や全体像について</li> <li>● 乳幼児教育ビジョン・小中一貫教育基本方針について</li> <li>● 次期学習指導要領・幼稚園教育要領・保育所保育指針の改訂の方向性について</li> </ul> <p style="text-align: center; color: red; font-weight: bold;">↓</p> <p style="text-align: center; color: red;">.....意見交流.....</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● どんなカリキュラムにしたいか</li> <li>● カリキュラムを作る上で大事にしたいこと</li> </ul> <p style="text-align: center; color: red; font-weight: bold;">舞鶴ならではのカリキュラムに</p>	<p><b>第2回策定会議</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 保幼小接続カリキュラムの具体的な作成イメージの確認</li> </ul> <p style="text-align: center; font-size: 1.5em; color: blue; font-weight: bold;">「育ち」「連携」「事例」</p> <p style="text-align: center; color: blue; font-size: 2em;">↓</p> <p style="text-align: center; color: red;">.....2グループに分かれ意見交流.....</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 現状と課題</li> <li>● 育ってほしい子どもの姿 等</li> </ul>															
<p><b>なめらかな接続について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 5歳児修了時に付けておきたい力を保幼小で共有</li> <li>● 幼児教育と小学校教育の学びのつながりを実践的に理解し繋ぐ</li> <li>● 幼児教育は小学校教育の前倒しではない「協同的な学び」興味や関心を生かした学び</li> <li>● 小学校は保育所・幼稚園での育ちを引き継ぎ、学習への興味・関心を高める学習活動に</li> <li>● 子どもの自信や自己肯定感をつなぐ</li> </ul>	<p><b>連携活動について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 小学校への親しみや安心感が生まれる</li> <li>● 教員同士の相互理解が深まり、学びがつながる</li> <li>● 子どもへの認識のずれがあることに気付くことができた</li> <li>● 互恵性のある連携活動をしていくために、接続カリキュラムは必要</li> </ul>															

課題について	今後の方向性(溝邊会長より)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育の内容や方法、生活環境の大きな違いが、子どもたちにとって大きな段差に</li> <li>● 主体的な遊びや体験を大事にした幼児教育から教師の指示が多く教えられる1年生の授業に？つながっていないのでは</li> <li>● 自分で判断し行動できる子どもを保幼小中で育てていくべき</li> <li>● 個人の発展性・長所を生かす教育に</li> <li>● その子らしい発想を認め受け止める姿勢が大切</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学び手を育てていくためには・・・ <b>学び手の目線で「何を見て考え、何を学んでいるか」意識を向けること</b></li> <li>● 子どもを原点にして、子どもに着目して作成する必要 <b>舞鶴の子どもはどんな姿か</b> <b>滑らかな接続とは何が滑らかなのか</b></li> <li>● 子どもの育ち、子どもの姿をどのようにしていけばよいか</li> </ul>

保幼小接続カリキュラム策定検討会議の様子



グループに分かれて検討

◎市内全園、全校が共通理解のもと、活用していただけるカリキュラムにしていきたい。  
◎子どもの姿や育ち、学びが見てとれるような、舞鶴ならではのカリキュラムを作成したい。  
という前向きな意見が多く出されました。

りを踏まえた教育を充実させることが求められている。  
◎小学校は、保育所や幼稚園での育ちを確実に引き継ぎ、小学校での学習に興味・関心を持って取り組んでいけるように学習活動を創造することが必要である。  
◎保育所や幼稚園は、子どもたちが先生に認められたりほめられたりしたこと、得意としていること等を学校へ引き継ぎ、保育所や幼稚園からの自信や自己肯定感を小学校へ繋いでいくことが大切である。

【副会長より】

第1回策定会議

はじめに市より保幼小接続カリキュラム策定の趣旨や全体像及び、乳幼児教育ビジョン・小中一貫教育基本方針についての説明を受け、カリキュラムのイメージ、それぞれの育てたい子ども像や、教育方針の共有を図りました。また、接続カリキュラム策定に向けて本会議の会長である、兵庫教育大学大学院教授 溝邊先生より次期学習指導要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂の方向性について講義をしていただき、今後のカリキュラム策定に向けて、大いに参考となるお話を伺いました。  
◎舞鶴で生まれ育ち社会や世界に貢献できる人材をいかに育成していくか。  
◎ふるさと舞鶴を子どもたちとどのように創り上げていくかというビジョンを持って作成したい。接続のカリキュラムの作成に止まらず、それに基づいた実践事例を出し合うことを大事にしたい。

第2回策定会議

はじめに、保幼小接続カリキュラムの具体的な作成イメージと、スケジュール等について確認しました。育ち・連携・事例のキーワードに分けて検討をしていくという説明を聞き、討議の方向性や進め方、作成方法等について共通理解しました。  
その後、普段感じている現状と課題、育てほしい子どもの姿等、委員それぞれの思いを共有するため、2グループに分かれ協議をしました。それぞれのグループから出た主な意見を項目に分けて紹介します。  
**なめらかな接続**  
◎5歳児修了時にどういう力をつけておきたいかということを保幼小の先生が共有することがなめらかな接続につながるのではないかと。  
◎授業参観・保育参観や情報交換等の交流を進めていながら、幼児教育と小学校教育の学びのつながりを実践的に理解し、繋いでいく必要がある。  
◎幼児教育は、小学校教育の前倒しではない。就学前には、「協同的な学び」を意識して取り組み、興味や関心にそった活動から、興味や関心を生かした学びなど、小学校へのつなが

連携活動

◎保幼小連携をすることで、子どもたちに、小学校への親しみや安心感が生まれている。小学校が楽しいと思えることや、学校に対するイメージが持てるということは、とても大切である。  
◎教師同士が互いの姿を見ることにつながり、連携活動に向け、カリキュラムの作成や、協議、情報共有を重ねることで、相互理解が深まり、学びが上手くつながる。  
◎連携活動を通して、保幼小の先生同士に、子どもへの認識のずれがあることが分かった。小学校の先生が予想以上の園児の力に驚く場面があった。  
◎イベント的な連携活動ではなく、互恵性のある、連携活動をしていくためにも、接続カリキュラムは大切だと思う。

課題

◎幼児教育から小学校教育へと移行する際には、教育の内容や方法、生活環境等に大きな違いがあり、小学校に入学した子どもたちにとっては、これが大きな段差となり戸惑いが生じ、急激な変化に対応できないこともあるのではないかと。

◎幼児期は主体的な遊びや体験、環境を通して学び育つということが大切である。しかし、1年生になったとたん、教師が指示を出したり、教えたりすることが多くなり、教師が個々の子どもの素朴な疑問や思いを受け止めることが難しいように感じる。

◎指示を受けて行動するのではなく、今どうするべきか自分で判断し、行動できることを保幼小中で大事にしていくことが必要である。

◎学校教育では、カリキュラムに縛られてそれ以外の発展的な思考を押さえてしまう傾向がある。今後、個人の発展性や得意な所を伸ばす教育が必要ではないか。

◎教科のねらいから外れた点に関心を持っている子がいた場合、ねらいから外れていても、その子らしい発想を認め受け止める姿勢が大切である。教師にはそんな幅の広さや懐の深さが求められる。

これらの意見が出され、それぞれが普段感じている熱い思いを語り合うことで、今後、より議論を深めていくべき内容や課題を委員が共有できました。また、グループ協議を終え、会長である溝邊先生よりまとめ及び、今後の方向性をお話しいただきました。

◎学び手を育てていくためには、育てる側が学び手目線で“何を見て何を考え、何を学んでいるか…”ということに常に意識を向けることが大切。

◎委員が子どもを原点に考え、舞鶴の子どもはどんな姿か、滑らかな接続とは何が滑らかなのか…と、子どもに着目して作成していく必要がある。

◎子どもの育ち、子どもの姿をどのように育てていけばよいかということ模索してほしい。

私自身、これまでの2回の会議に参加して、保育所や幼稚園の先生方と意見交流する中で、幼児教育と小学校教育の違いや各々で大切にしている点などが分かってきました。

まず、園と学校がお互いの特色を理解し、互惠性のある活動を通してスムーズにつながっていけるよう、保幼小接続カリキュラムの策定を進めていきたいと考えています。

#### 【会長より】

策定会議はいろんな立場で議論を進めていただいている。

3つの柱をもとに進めている。

①子どもファースト、どう子どもの歩みが見えるか。

②舞鶴オリジナル、どう具現化していくか。

③現場ベースを生かして取り入れ、教育的意図が表れたものにしていく。

保育所・幼稚園・小学校、3つが合体するという縫い目のないシームレスなカリキュラムになる、これが子どものなめらかな発達につながる。





5 子どもを主体とした保育:ドキュメンテーション・記録 報告

**グループワーク**

**【方法】**  
各園で書いているドキュメンテーションを元に遊びの中での学び、育ち、保育者の関わりなどをワークシートを活用してグループごとに語り合う

**【ワークシートの視点】**



- ◎子どもの姿・言葉、思い
- ◎保育者の関わり、ねらい、意図
- ◎環境(意図的な環境)
- ◎遊びの中の育ちや学び
  - ・幼稚園教育要領、保育所保育指針の5領域
  - ・保育所保育指針「子どもの発達」から読み取る
- ◎続きの保育をあなたが展開するとしたら...

**グループワーク**

**【目的・効果】**

- ◎記録を見とることで保育の視点を定めていく
- ◎見えにくい遊びの中の育ちや学びを意識して見ようとする
- ◎いろいろな見方・とらえ方を知り、保育の引出しが増える
- ◎保育を語ることで自分の保育も振り返る

**保育リーダー研修**

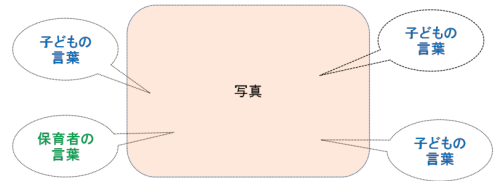
**【方法】**  
グループワークと同様  
※ファシリテーターとして進行役を体験

**【目的・効果】**  
・各園の保育のリーダーとなる保育者を対象に、園内研修の方法やリーダーの役割について学ぶ




**園内研修へ活用**

**ドキュメンテーション(例)**



写真

子どもの言葉

保育者の言葉


子どもの言葉

子どもの言葉

状況説明 経過

保育者の関わり(ねらい、意図、環境)

考察(育ち・学び)



なんで先生のは速くに転がったんやろ?

大きいから

なんで大きかったら速くに行くんやろ?

違うのも転がしてみる? 大きいのと小さいの? どっちから転がす?

いっしょに転がす

どうなるかな?...

われると思うて

あっ

壊れたな...

でも、途中で大きい方が小さいのめかしたで

つぶれたけど、早かったなあ

2~3人の子も達が、桶をつなげ泥団子を転がす遊びを楽しんでいた。泥団子は、土の種類によってそれぞれの特徴があることを知っていて、その美しさや形などにこだわって作る子どもたちと、転がすために壊れない泥団子を作る子どもたちもいる。この日は、桶の先に入れ物を置いて、泥団子を転がして入れることを楽しんでいた。

保育者が転がした団子が入れ物より速くに転がった。そのあと、大ききの違う団子をいっしょに転がすと...大きい方が先に転がり、勢いあまって砂場の淵に当たり壊れた。

物体の大きさによって速度や距離が違うことに気づき、関心を深めている

大きさによって距離や速度が違うことをより明確にするために、大きさの違う泥団子で試したり、予測をするように問いかけたりした

公開保育の子どもの姿・言葉メモと写真より

◎幼稚園、保育所、小学校、中学校、大学に関わらず、教育する次世代を育成するという仕事の現象、実践をとまうところには記録はとても大事。

◎一人で実践をふり返ったり、記録するのは次元が変わる、自分以外の視点、関心を持っている教育専門職同士が語り合える。

◎今日は幼稚園、保育園の先生方が対象だが、ここに小学校低学年の先生が加わられたらどうかということも考える。

◎今からの時代の子どもたちには、実践の記録、ドキュメンテーションを中心としてその育ちや学びを促す手段として、教育の実践力の向上を図ることがもっとも必要になる。

◎学習指導要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針の改正のキーワードはアクティブラーニング、カリキュラムマネジメント。

◎乳幼児の教育は、教科主義的教育ではなく、実践を通しての経験主義的教育。

◎ドキュメンテーションをいかしながら学んでいく内容をもっと可視化する。

◎現象として学んでいるが、子どもたちがアクティブに学ぶ姿をもっと可視化し共有し、そこにどう教育的な援助が行われるのかを考えることが大事。

◎ドキュメンテーションは、単にドキュメンテーションの技術としての方法を学ぶというよりは、いわゆる現象としておこっている教育の内容を見抜く力、議論する力、援助の方法を向上させていくために作る。

◎教育、保育は実践、実践は現象、現象は消えていく。視点があって記録があり、可視化し、共有できるし議論ができる。

◎ドキュメンテーションは、現象として流れて消えていく教育の実践の中身を説明したり、議論し質の向上をはかっていく、そのために必要なもの。

◎実践を伴った専門職が専門性を向上させるためには記録はキーワード。

## 各園のドキュメンテーション



6 講演

「乳幼児教育の質向上のための園内研修の方法～ドキュメンテーションを活用して～」

神戸大学大学院 北野幸子先生

今日は接続期のこともたくさん出てきて、保幼小連携、接続カリキュラムの策定あり感無量。

今、目指しているところは保幼小中高の教育が大事。年齢による格差はない。幼児期が特に大事というわけでもなく、小学校が特に大事でもなくどこも大事。

小学校、幼稚園、保育所の先生が、一緒に研修されていることはありがたい。小・中学校は研修保障があるが、それを全ての保育所・幼稚園にも同等な形で受けられるよう教育委員会にお願いしたい。初任研、10年研はぜひ一緒にやっていただき、次世代育成のコミュニティの創生を考えていただきたい。

乳幼児教育の質向上のための園内研修をどう作っていくのか、それを市の研修にどうつなげていくのかを考えたい。

【保育者の主体性】

◎子どもの主体性を発揮するには、保育者や教師の主体性も大事。  
◎日本の幼児教育の歴史は、子どもたちの傍らに寄り添って教えているという相互作用がある。子どもに関わる心持ち、尊さ、謙虚な気持ち、謙遜の心、善意、地域への貢献や慈善からスタートしているそういう文化がある。

◎子どもたちのために頑張りすぎるのが保育所・幼稚園の先生、小学校の先生の特徴だが、先生方が身体や心を壊してはいけない。そのことが子どもたちのため、先生方こそが教育の資源、次世代育成にとって先生方が大事。先生が継続勤務できないことが問題となっている。

◎OECDが出している2005教師の重要性より、教育の質は教師こそが握っている。継続勤務、安心、安全、力量、実践力の向上は、記録、ドキュメンテーション、実践の振り返り、実践を見抜く視点を蓄積していくこと。単に経験を重ねるだけでなく、振り返りながら実践力を向上させ、学び続けながら経験を蓄積していくことが大事。

◎子どもが対象である場合、子ども

たちのためということを考えがちな文化が、保育所・幼稚園、小学校など教育というやりがいのある仕事はそれゆえ落とし穴がある。

◎実践の振り返りを行った時に多くの先生方は欠点をあげて「この時こうすればよかったのに」「あの時もっと環境構成ができたのに」「もっと教材研究ができたかもしれない」いわゆる自己評価の低さが教育職にあるものの特徴のひとつでもある。

◎管理職の先生方は特に、**園の先生方の自己実現、自己発揮これこそが子どもの主体性の尊重の大事な背景になることを意識してほしい。**

【保育者の専門性】

◎小学校以降の教科主義教育も大事だが、発達的に乳幼児期は自己中心性が強く経験的に学ぶ。

◎五感が敏感で、小学校以降よりももっとマニュアル化できないのが乳幼児期。先生自身が判断を下さなければいけない難しさがある。

◎専門性の高い仕事は、人の命を預かり、自分の判断で決めなければいけない場面が沢山あること。これが高度な専門職。保育・教育の現場では常に先生方が判断を下している。

【同僚性を育む園内研修に!】

◎園内研修によって、人間関係が悪くならないように気をつける。

◎管理職、主任の先生は、「あの時子どもがこんなこと言っていたのに何で見てなかったんだろう」「もっと準備してたらもっとできたはずじゃないの」「何で変えようとしないうちのんだろう」など、他者に対する期待や要求が高くないよう意識することが大事。子どものために当然ではあるが、そういう危険性がある仕事であることを認識し、尊敬し合う、共に成長し合う同僚性を育む。

◎アメリカの保育所、幼稚園、小学校2年生8歳ぐらいまでの教育専門職の倫理の中には、「同僚の尊重、同僚のそれぞれが違い多様であることを尊重する。子どもたちも大人たちもそれぞれの可能性を最大限発揮できる」ということが書かれて



いる。  
◎園内研や研修を行うにも、それぞれの得意分野の開発やチームとしての教育力の向上を尊重していく。

【園内研修の内容について】

◎研修が与えられたり、やらされる感、人に言われてるからしている感から、職責として養成と研修は絶対必要なもので、それをし続けることが待遇や処遇の改善にも関わっている、研修自体がこの仕事大切な仕事だと表すものということも浸透させたい。

◎受動的な研修から能動的な研修に園内研修を変えていく。

◎先生方にとっての内発的動機付け、つまり自明性、必然性が大事。

◎園長、校長や先生方が、子どもの姿に高い関心をもたれると園も変わる。

◎子どもの具体的な名前、子どもの具体的な姿、子どもの発言、子どもの行動をたくさん語る文化を作っていくこと。「まずは語ろう」が園内研修のスタート。

◎園長、主任、先生方一人ひとりが、今この子どもたちはどんな気持ちなのか、今どんなものに興味関心を持っているのか、今どんな発達の過程にあるのか、この子たちに今どのような生活や発達の課題があるのかを見ようと、語ろうとする。

◎保育・教育課程や指導計画、実践の検討や行事あり方、絵本や歌の選曲など、何人の子どもの名前、姿、行動が先生方の中に浮かび、子どもの姿からスタートできているかが大事。

◎子ども理解からカリキュラム作

成を考える3つの視点。

1. 興味・関心
2. 発達の視点
3. 生活課題

◎ドキュメンテーションを見るときに、発達の視点、学びや育ちの見取りがあるか、それを促すための環境構成や保育者の援助の視点があるかを探す。そういう視点を持つと自明性、必然性がわかってくる。

◎先生方自身が主体的にアクティブに学ぶ、話す、動く、気持ちが揺さぶられる、考える、実際につくる。これが主体的で能動的であり、身体と心がどうなるのかを体験することになる。

◎先生同士が「ここが良くなったね」「ここ工夫してたね」「ここが変わったね」と研修の結果、変化がほめられ、研修の意義が実感できるようにする。これが受動的な研修から能動的な研修へ園内の研修を変えていくことにつながる。

◎どれだけ活かされているかということ、先生方が実感できるようにすること、組織としての園内の同僚性の中にいくつかの要素ができていると可能であると言われている。

◎行動目標ベースで議論する習慣が、先生同士の中でできていること。

◎勉強会や話し合いの結果、どういう風に自分の行動目標として課題を抽出し、実際変化できるのか、例えば園内研修の後に必ず、「明日あなたのクラスの教室の環境のどこを変えるのか」「明日あなたは〇〇ちゃんになって言葉がけをするのか」「明日あなたはどんな絵本を選び、どんな歌をうたうのか」学んだこと、研修したことが行動ベースで変化として先生方にフィードバックできているか。行動目標をもち実際に行動するこのことが大事。（「手軽に園内研修メイキング～みんなで作る保育のカ～」北野幸子先生編著を参照）

◎気軽に、準備なし、持ち込みなしで1人3分自分の保育を5人が話し、主任、園長が5分、その保育の発展や先の行動目標を提出するような研修から取り組む。

#### 【これからの研修システム】

◎研修はさせられるものではなく、言われてするものでもない。この仕事には当然必要なものであり、自助努力でやることではなく、制度として図られなければいけない。

◎教育委員会の初任研、10年研は、公立、私立、幼稚園、保育園を問わず全てに対して保障できていく様な学び続けるシステムを作っていきたい。

◎厚生労働省に働きかけ続け、保育者の専門性について、資格の階層化、研修を保障し、研修によって得た知識、身につけた実践力、応用力、判断力がついて、それによって任される仕事をきちんと階層化して、資格と仕事の業務内容と待遇をセットで、保育士全体をあげてほしいという報告書を提出し、10年目にしてようやく保育士の先生方の研修に対して予算がついた。できるところからやっていき日本のモデルになっていく。

#### 【市の乳幼児教育の質向上研修】

◎日本の研修の保障に関して、舞鶴市は市の皆さんがとっても熱心で、日本中の10市しかやっていない「幼児教育の推進体制構築事業」の予算をしっかりとられ、幼児教育の質向上を図っている。

◎無藤隆先生から「普通の小さな町がいかにして乳幼児教育で日本一になったかという本を書いたら」と勧められている。

◎これほど多くの公開保育を公立、私立、保育園、幼稚園を越えてやっているところは少なく、大豆生田啓友先生をはじめ、先生方がそれぞれの地域で舞鶴方式を取り入れて公開保育を中心とした研修を実施している。公開保育とそれによる実践の質の向上は、舞鶴の皆さんの試みが日本中の先生方に注目されているところだと思う。

◎「公開に後悔なし効果あり」を日本中に広めていきたい。

◎舞鶴市では、公開保育をされ実践の質が向上されてきた実感がある。次はアクションリサーチ、実践の乳幼児教育の現場が抱えている課題を、園だけでなく研究者や外部の人たちと連携しながら研究ベースで改善していく。

◎A園の課題を研究者と一緒に改善していくために、データを集め改善の教材を開発し、環境を変える。その結果どういう成果が見られたか、研究ベースでエビデンスを出す。アクションリサーチの成果は自園のみならず他園でも応用が可能な地域の実践現場の財産になる。

◎舞鶴市でも小学校のほうから指定校研究その他の助成金を取っていた

だき、保幼小連携実践研究のアクションリサーチ実践研究のベースを作してほしい。

◎改定では、アクティブラーニングの推進、カリキュラムマネジメントがキーワードとなっている。その中でも10の視点と実践の記録があるが、知識と技術と情意、心情、意欲、態度、応用力、活用力、こういう力の柱を生まれてから保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学とずっとつらね、子どもたちの教育の柱、校種、園種を越えた教育の柱を作っていく。



講演資料

乳幼児教育の質向上のための園内研修の方法  
～ドキュメンテーションを活用して～

北野 幸子  
神戸大学大学院

子どもの主体性と保育者の自己発揮

保育の文化: 謙虚な気持ち、謙遜の心、善意

やりがいのある仕事の落とし穴  
自己評価の低さ  
マニュアル化できない困難さ  
自らの責任で判断を下さなければならない厳しさ  
子どものために頑張り過ぎ疲弊してしまう危険  
他の同僚への要求や期待が高くなりすぎる傾向

全国保育士会倫理綱領より

(チームワークと自己評価)

5. 私たちは、職場におけるチームワークや、関係する他の専門機関との連携を大切にします。また、自らの行う保育について、常に子どもの視点に立って自己評価を行い、保育の質の向上を図ります。

(専門職としての責務)

8. 私たちは、研修や自己研鑽を通して、常に自らの人間性と専門性の向上に努め、専門職としての責務を果たします。

全米乳幼児教育協会 (NAEYC) の  
理念: 本質的価値 (Core Values)

幼年期を生涯における独自で価値の高い時期として評価する  
われわれの仕事は子どもの発達と学びに関する知識を基盤としておこなう  
子どもと家庭の絆を大切に、その支援をおこなう  
家庭、文化、地域、社会的な文脈においてこそ子どもをよりよく理解できるということを認識する  
一人ひとりの尊厳、価値、独自性を尊重する(子ども、家族の成員、そして同僚一人ひとりの)  
子ども、家庭、同僚それぞれが違い多様であることを尊重する  
信頼と尊厳を前提とした人間関係において、子どもたちも大人たちもそれぞれが、その可能性を最大限発揮されることを認識する

『児童福祉施設の設備及び運営に関する基準』  
(児童福祉施設の職員の知識及び技能の向上等)

第七条の二 児童福祉施設の職員は、常に自己研鑽に励み、法に定めるそれぞれの施設の目的を達成するために必要な知識及び技能の修得、維持及び向上に努めなければならない。

2 児童福祉施設は、職員に対し、その資質の向上のための研修の機会を確保せねばならない。

『保育所保育士指針』  
第七章 職員の資質向上

3 職員の研修等

(一) 職員は、子どもの保育及び保護者に対する保育に関する指導が適切に行われるように、自己評価に基づく課題等を踏まえ、保育所内外の研修等を通じて、必要な知識及び技術の修得、維持及び向上に努めなければならない。

(二) 職員一人一人が課題を持って主体的に学ぶとともに、他の職員や地域の関係機関など、様々な人や場との関わりの中で共に学び合う環境を醸成していくことにより、保育所の活性化を図っていくことが求められる。

『教育基本法』

第九条 法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。

二 前項の教員については、その使命と職責の重要性をかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実がはからなければならない。

↓  
『地方公務員法』第三十九条 研修規定  
『教育公務員特例法』  
第二十一条 研修規定、第二十二條 研修の機会の保障規、定 第二十三條 初任者研修  
第二十四條 十年経験者研修の規定

学び続ける保育者を支えよう

努力し学び続けている人の支援

研修した人としていない人:  
差異化、評価、待遇改善のシステム

研修履歴、分野についての記録を保育者個人ベースで

保育士会のキャリアパス  
全国私立幼稚園連合会の俯瞰図  
はあるが...

自己研鑽、各自の判断から システムへ  
参考: 無藤他(2014)『認定こども園の時代』ひかりのくに、p.100-101

研修の工夫

受動的研修から  
与えられた研修課題、講演の聴講



能動的研修へ  
子どもの姿からの課題抽出  
保育課程、指導計画の作成、実践の検討、課題抽出

能動的研修の充実: 園の同僚性意識の確立へ

受動的研修から能動的研修へ

- 動機づけ  
自明性と必然性=具体的な子どもの姿  
(興味関心、発達の特徴、生活課題等)
- 研修の参加と参画  
個々が、発言したり、考えたり、創ったり
- 研修の結果、意義の実感
- 研修の後の評価  
抽象的評価から、変化を可視化し、評価を発信する

**研修をどう活かすか、を意識する**

行動目標ベースで議論する

この研修をして

保育にどうフィードバックするのか

行動目標  
環境設定  
教材づくり  
子どもにどう援助する  
(何を話す、どう話す、何をさせる(モデル))

**職員の資質の向上の発展  
保育を**

語る  
↓  
考える  
↓  
創る  
↓  
公開する  
↓  
アクション・リサーチ

**公開保育**

**保育の公開**とそれによる実践の質向上

実践者と研究者の協同:実践の課題解決を図る

課題:保育者が学び続ける環境の格差を是正、個人ベースでの支援や、実態を把握ができる体制づくり

**園内研修から実践研究へ**

支援体制:知られているようで、知られていない

例:

- 研究開発学校制度  
(学校教育法施行規則第五十五条等に基づく)
- 研究指定校事業制度  
(国立教育政策研究所事業)
- 各地方自治体の指定校研究

**研修保障とインテンシブ**

環境構成の時間保障  
教材研究の時間保障  
振り返りの時間の保障  
記録の時間の保障

→園内研修の充実、さらには公開  
年一人2日は最低でも・・・3日、5日へ

**研修保障とインテンシブ**

法定研修  
初任者研修と10年目研修その他の保障

H31年免許法改正  
大学・教育委員会との連携  
10年目研修の弾力化  
専修免許の認定講習

**改訂・改定にあたり、  
変わらずに、大切にしたいこと**

- 養護を基盤とした保育  
→ 前提としてより確固とした位置づけへ
- 環境を通じた保育
- 主体性を尊重する保育
- 遊びと生活、経験主義的教育

**格差是正の観点から乳幼児教育保障**

改訂・改定の特徴

- 3歳以上についての教育の共通化
- 3歳未満児保育の大切さとその質
- 次世代育成の基軸としての位置づけ  
一貫性、連続性ある柱としての資質能力

**アクティブ・ラーニングの推進**

一方向的な講義形式の教育 ×

能動的学びの方法  
汎用的能力の育成  
(認知、倫理、社会性、教養、知識、経験)

発見、問題解決、体験、調査  
ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク

「主体的な学び」  
周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につなげる

「対話的な学び」  
他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める

「深い学び」  
直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返して、生活を意味あるものとして捉える

### カリキュラム・マネジメント

PLAN (計画)にあたって  
 <子どもの姿>  
 ●遊びや生活における子どもの興味関心  
 ●発達の特徴 ●生活課題  
 ↓  
 ねらいの設定  
 ↓  
 ねらいの達成につながる  
 ●内容: 選択の理由を明示  
 ●環境構成 ●援助の工夫  
 ↓  
 評価の観点

### 保育実践の実質化、具現化

**全体的な計画**(教育課程 保育課程を含む)  
 配慮事項や留意点の中で安定的なもの  
 目標およびそれに準じる環境構成等

**指導計画**  
 長期指導計画 短期指導計画  
 園や時期などによって変わる

### 芽生えをはぐむ乳幼児教育

遊びや生活の中で体験的に芽生えをはぐむ  
 知識や技能の基礎  
 感じたり、気付いたり、わかったり、できるようになったり

思考力・判断力・表現力等の基礎  
 考えたり、試したり、工夫したり、表現したり

学びに向かう力、人間性等  
 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営むか

### 幼児期の終わりまでに育てたい姿

- (ア) 健康な心と体
- (イ) 自立心
- (ウ) 協同性
- (エ) 道徳性・規範意識の芽生え
- (オ) 社会生活との関わり
- (カ) 思考力の芽生え
- (キ) 自然との関わり・生命尊重
- (ク) 数量・図形、文字等への関心・感覚
- (ケ) 言葉による伝え合い
- (コ) 豊かな感性と表現

### 保育の独自性と専門性

**保育の独自性**  
 \* 子どもの主体性の尊重 \* 環境を通じた保育  
 \* 目的志向型ではない保育

●家庭保育との違い: 集団教育の醍醐味  
 ・多様性への寛容性を育む: 社会性、人権意識  
 ・豊かな経験を保障する: 多方面への知性の扉

●小学校以降の教科主義教育との違い=**経験主義教育**  
 ・リアリティ・自明性・必然性  
 ・汎用性と応用性・**アクティブ・ラーニング**

保育の**質の鍵**を握るのは、**専門職**としての**保育者**

### 保育の独自性と専門性

保育の**質の鍵**を握るのは、**専門職**としての**保育者**

遊びを通じた学び=**アクティブ・ラーニング**  
 \* 子どもが安心して過ごせること  
 \* 子どもの思いが出しやすいこと  
 \* 好奇心、探求心、あこがれが受け止められること  
 \* 能動的な育ちや学びが保障されること

カリキュラム・マネジメント  
 \* 子どもの姿から、子どもと共に創る保育だからこそ  
 \* 一人一人が保育カリキュラムの適正化を目指す  
 \* 育てたいこども像、保育の評価の観点を持つ  
 \* PDCAサイクル

### ドキュメンテーションとは

子どもを主体とした遊びや生活、  
 身近な自然からうまれる  
 子どもの**好奇心・探求心・あこがれ**を起点とした  
 子どもと保育者の相互作用を重視した保育の可視化へ

**「ドキュメンテーション」**  
 遊びの中の子どもの育ちや学びを可視化

保護者に発信  
 (保育者や子どもも共有)

### 保育の可視化と保育の楽しさの再発見、 専門職としての自負へ

プロジェクト型保育の醍醐味を知る  
 子どもの「好奇心」「探求心」「あこがれ」を起点とする

子どもの主体性の尊重、遊びを通じた教育  
 <応答的であつ教育的でなければならない>

個々の保育者の能力や感性に依拠しすぎない

### ドキュメンテーションの活用

記録  
 絞り込む: 現象 → 議論可能に

視点を持つ  
 質向上が図れる

カリキュラム・マネジメント  
 実践記録、子どもの事実を柱に

### おわりに

【保幼小中連携研修会】

日時：平成29年2月27日(月) 13:30~16:30

場所：商工観光センター ホール

内容：

講演 「次期教育要領・学習指導要領等から考えるこれからの教育—主体的・対話的で深い学び—」

文部科学省 初等中等教育局 視学官 田村 学氏

報告 「保幼小接続カリキュラム策定会議研究状況について」 (※「平成28年度報告会」に掲載済み)

事務局

舞鶴市保幼小接続カリキュラム策定会議 副会長 岡本 明生

対談 「主体性を育む保幼小中の連携・接続」

舞鶴市保幼小接続カリキュラム策定会議 会長 溝邊 和成 氏  
(兵庫教育大学大学院教授)

文部科学省 初等中等教育局 視学官 田村 学 氏

講演 「次期教育要領・学習指導要領等から考えるこれからの教育—主体的・対話的で深い学び—」

文部科学省 初等中等教育局 視学官 田村 学氏



【これからの社会】

- ◎近い将来、10人中9人は今と違う仕事をしている。
- ◎20年以内に、今の仕事の47%は機械が行う。
- ◎機械化してほしくない職業は、保育士、幼稚園教諭、教師。
- ◎人材育成面での企業の期待と大学・大学院の取り組みについて
- ◎大学・大学院が教育面で特に注力している点は「知識の習得、能力の育成」。しかし、企業の大学・大学院への期待は「チームで課題に取り組む、自分の考えを引き出す、他者とのコミュニケーション能力」学校教育と一般社会にはミスマッチがあるのではないか。
- ◎学校教育に対する保護者の意識調査(中学2年生の保護者対象)多くの保護者は、社会に出て役立つ力をつけるべきと考えている。受験に役立つ学力は67.4%と考えている。

【学習指導要領改訂の方向性～主体的・対話的で深い学び～】

- ◎「何ができるようになるか」を意識しながらも「どのように学ぶか」を重視した。
- ◎「どのように学ぶか」は「主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニングの視点)」で示されてい

る。

- ◎知識・技能・思考力・判断力・表現力・学びに向う力・人間性等がプロセスとしての豊かな学びを実現させ、それぞれが大きく成長確かなものになっていく。
- ◎「主体的・対話的で深い学び」のもっともわかりやすい象徴的な事例の姿が幼児教育。保育所や幼稚園の子どもたちの姿こそが主体的、対話的で深い学びの姿。

～「主体的・対話的で深い学び」の事例を通して～

- ◎体験や活動を通して学び、力をつけていき、徐々に言葉が発達と共に入ってくる。
- ◎子どもたちは様々な体験の中から感じ考え行為することを繰り返し繰り返し行っている。このプロセスの充実が子どもたちの学びには大切である。
- ◎繰り返し体験することで、詳細な描写になり比べたり、変化に気付いたりする。
- ◎子どもたちの気付きが確かに広がったり、増えたりするには保育者や教師のねらいや関わりが大きく関係している。
- ◎保育者や教師は「～しなさい」とは言わず、経験してほしい思考や行

動につながる言葉をかける。子どもが自ら考え、行動することにつながる。

- ◎子どもたちの発言(言葉)を書き残していくことで、子どもたちはお互いの発言を関連付けてつなげて考え、新たな発言を生み出すことができる。

【学習指導要領改訂の方向性～手応え感覚～】

手応え感覚(ポジティブ感情)

気付きが高まる⇒思考がくり返し発揮される⇒学びに向う力 という意思をはっきりさせる。

- ◎「なるほど」「わかった」「みんなできた」⇒「またやってみよう」という充実感、達成感、自己有能感、一体感が好奇心、自立的欲求、向社会的欲求へとつながっていく。
- ◎この「手応え感覚」を何度も何度も繰り返し経験すると好ましい心的傾向性(また頑張ろう)が生まれ安定性につながる。
- ◎一生懸命やってもうまくいかないこともあり、だれも手伝ってくれない助けてくれないと、好ましくない心的傾向性(頑張ってもうまくいかない)を多く経験してしまうのは避けたい。



その他

【学習指導要領改訂の方向性～知識の構造化～】

◎知識の構造化には、自分の考えが言える、友だちが話を聞いてくれることが必要である。

◎児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現する学習方法が知識を活用することにつながる。

◎主体的・対話的で深い学びの視点による学習とは…考える⇒理解が深まる⇒振り返る⇒つながりに気付く⇒「すっきり」「なるほど」深い学び

◎幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」

◎学びの基礎は幼児教育にあり、様々な体験や活動を通して学び合う子どもの姿にある。

◎小学校低学年は幼児教育の学びに近いので、カリキュラムをうまくつ

なぐことが重要。

・小学校⇒話し合い、意見交換、自分を見つめ直す

・中学校・高校⇒自分の考えを他者に明確に伝える、じっくりと自己内で分析する、意見交換、ディスカッション

◎10の姿は幅広く社会にも広がっていくことができる。

対 談「主体性を育む保幼小中の連携・接続」

舞鶴市保幼小接続カリキュラム策定会議 会長 溝邊 和成 氏（兵庫教育大学大学院教授）  
文部科学省 初等中等教育局 視学官 田村 学 氏

【互恵性～保幼小連携～】

◎今までは、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、それぞれの発達に応じてカリキュラムを作っていくという前提があったが、これからは、それぞれをつなぐ、接続させていく必要がある。

◎子どもの側から見たカリキュラム、教育課程、学びのあり方、学習のさせ方が重要。例として、幼稚園児と1年生と一緒に何かするというイベントにより接続できているといわれるが、互恵性、お互いがお得になる、ウインウインの関係が結べているか。

～会場より～

◎小学校では、1年生にあがると6年生からお世話してもらうことが多いが、連携により下の子と交流すると自分達の力を試すことができ、お兄さんお姉さんぶって活動ができる。自分が何とかしなければ、こうしてあげたいという思い、自分もこうしたいという思いがあり、子どもたちにとっても意義のある活動になっていく。

◎保育園、幼稚園の年長児は、小学校の雰囲気を感じ取ってくれる。幼児にとっては、自分が行く小学校の雰囲気、イメージ、どんなことを学ぶかがわかる。

◎1年生にとっては、相手のことを思って考えて行動する力がつく。役に立ったと感ずることができる。

◎今年度の連携活動においては、してあげるという視点ではなく、一緒に楽しむ、お互いに得るものがあるということを目標に、保育所・幼稚園の先生方と小学校の教師と一緒に取り組めた。

◎人のために役立っていることは幼児期から経験している。

◎1年間小学校で学んだことを学び直すことができる。この時にこんなことを学んだということ、自分がフラッシュバックして、今度1年生になる子ども達には、どういうことをいつどんな時にどんな内容を学ぶのかということ、自分の学びの振り返りと整理ができる。幼児を鏡にして自分を見つめ直す場になる。

～会場より～

◎学校に対する不安があり、子どもにとっては未知の場所なので、そこに足を運んだり経験することは不安を解消でき、知っている人が学校にたくさんできることは、期待や安心ができる。

◎今まではイベント的な活動だったので、今年度は何度も交流させていただいたことによって、小学生の子ども達は、回を重ねるごとに相手が小さいことを認識して、言葉を細かくていねいに伝えてくれるようになり、相手の立場に立って相手に分かりやすいように話す力が育ったと感ずる。

◎互恵性は誰にとってウインウインか？子ども同士だけでなく、大人同士も互恵性があるか？

◎お互いに得るということは、子どもたちの発達にとってなぜ必要なのかを互いに出し合っていないといけない。幼児期の子どもたちにとっても豊かな学びになるような連携の場を作らなければならない。

◎今までは1年生主導の活動や目当てに、幼稚園・保育園の子どもたちを合わせてもらうというお手伝いの形だった。

◎活動を進める以前に、先生方がお



互いに話し合う、子どもの育ち、子どもをどういう方向へ向けて行きたいかという話し合いの重厚さが足りなかったのではないかと。

◎舞鶴はこれから接続カリキュラムを策定していく中で、子どもの実際の事実を目の前にしながら、先生方が一緒に5歳～7歳の子どもたちを、どういう子どもに育てたいかという話し合いの前提のなかで活動をどうするか、「何時、どこで、どのようにするか」を考えていってほしい。

◎小学校の大きな組織は幼児教育のほうに目が向いていなかったが、指導要領や幼稚園教育要領に保幼小連携が明確に入り、保育所・幼稚園はチャンスが出てきた。互いにコミュニケーションを取り、意見交換できる中で好ましい互恵性のある連携にしてほしい。

【互恵性～小中連携～】

～会場より～

◎中学校の現場では互恵性という言葉は使われていない。

◎子ども側の互恵性は、6年生が中学校に対するマイナスイメージを払拭し、中学校へ行っても頑張るという意識をもつ。部活動など中学生が年下の子どもに教えることは、自己有用感を持つことにつながる。

◎教師側の互恵性は、小学校の段階で中学校に必要な力をつけるためにはどんな力があるのかをお互いに勉強する。例えば友だちとのコミュニケーション力など、小中が連携して作っていく必要がある。

◎大人のウインウインの関係は連携して何かをする、会議で何かを作る時は、まず互いに顔や名前がわかる関係になる。次に大事なことは、小学校の先生は幼児教育の特徴、強みを知る、中学校の先生は小学校の授業を知る。他者の強みを知ることは自分の強みを知ることになる。

◎中学校の教師が、保育所・幼稚園にいくとよい。

◎子どもの育ちを考える時は先生方がどうあるべきかがポイント、小中の先生が保育所・幼稚園で何を見に行くのが大事。「10の姿」の育てほしい力をどう見ればいいのかの一つの材料になる。コミュニケーション能力の視点に立ち園・校種を越えて参観し合うと変わってくる。

#### 【10の姿の視点について】

◎10の姿の視点は幼児期の終わりまでに育てほしい姿として作ったが、中学生にもあてはまる。

◎幼児期は、周りの先生達に支えられながら子どもたちがこういうことができる。中・高校生は自分たちの力でできるようになっていく。

◎幼児教育の関係者はこういう力をつけるというイメージを持つ。小学校の先生はこういうことを目指して育ててくれていることをもとに、小学校の授業を行わなければならないと考えることで接続がスムーズになる。

#### 【カリキュラムマネジメント】

◎接続カリキュラム、スタートカリキュラム、アプローチカリキュラムが言われているが何をすればよいのか。

◎0歳から15歳までの育ちを意識していかないといけない。

◎カリキュラム・マネジメントとは、カリキュラムをデザインすること、編成・実施・評価・改善していくPDCAサイクルを確立すること、人的・物的資源等を活用することである。

◎カリキュラムをデザインするとは、何を、いつ、どんなふうに学ぶかを設計すること。子どもたちの特徴、個性、今年の子どもたちの成長、舞鶴の子どもたちにとってはどうかを考えてデザインしていくことが大事。

◎適応するというカリキュラムではなく、より良さが発揮されるようなカリキュラムが大事。

◎舞鶴の保育所・幼稚園で学んできた子どもたちが、小学校でこんなに発揮できる、小学校で学んだ子どもたちが中学校でこんなに発揮できるものに。

◎自分達が何か目的を持って作り上げていくというデザインの思考が先生の中でも重要で、その中でどうマネジメントしていくか。

◎マネジメントは保育所・幼稚園の先生が上手、小中は教科書があり依存せざるを得ない。

◎幼児教育は日々の生活はどうなっている、1年間はこんな風になっているという生活の場を土台にして期を分けているが、学校は学期ごとを大人の理屈で作っている。小学校の先生は幼児期のカリキュラムのデザインに学ぶとよい。

◎子どもが感じ、考え、行動し、振り返ることをカリキュラムのベースにし、デザインの中に入れていただく

と、小さい子どもから中学生まで、同じサイクルで物を見て考えて育つことができるのではないかと。

#### 【舞鶴の保幼小接続カリキュラムに期待したいこと】

◎この場に幼児教育関係者、小学校、中学校関係者の方が集まっていることが舞鶴の強み、ストロングポイント。0歳から15歳をつなげていく。

◎主体性を大事にしたいという思い、これを大事にされるとよい。

◎認知系（テストではかる）非認知系（テストではかれない）があるが、幼児教育は非認知系を大事にし、このことこそが将来に渡って子どもたちの一人一人の豊かな能力の発揮になり、豊かな社会の形成にもつながる。乳幼児期で育てている子どもの主体性を、小学校、中学校でも育ててほしい。そうすることで、舞鶴の子どもたちはほとんど「自分から」という子どもたちになれる可能性がある。

◎乳幼児教育ビジョンの「主体性」という言葉と小中一貫教育標準カリキュラムの「学び手」という言葉をキーワードにし、舞鶴らしいカリキュラムの作成を期待したい。

